

Newsletter

2006. Jul. No. 8

より良い大学教育を目指して

教養研究センター副所長 佐藤 望



教養研究センターのミッションのひとつに、「時代と社会の変化に対応できる教養および教養教育にかかわる総合的な研究」があります。その研究活動の一環として現在、基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」が展開されています。大学が、その教授内容や方法において、社会の要請や学生の期待にきちんと応えることができているかについて多角的に検証する研究です。具体的には、大学教育をめぐる諸問題の考察の他に、各学部のカリキュラム改革の現状とその比較、成績評価の方法についての研究、クラス編成や履修登録の問題の検証、アンケート調査による学生の声の収集などを行っています。

大学で身につけるべき教養とは何か、理想の大学教育とは、ということを議論することも大切です。しかしこうした論議は、現実を忘れた抽象論に陥りがちです。むしろ大切なのは、私たちの足下で行われている現実の教育ではないでしょうか。

私たちが毎日接する学生たちはものすごい勢いで多くのものを吸収して、精神的にも学力的にも成長を遂げてゆきます。目の前にいる学生たちの成長をいかに効

果的に手助けができるかが、日々私たちに問われています。

しかし、教育やカリキュラムに関する現実のさまざまな問題には、教員個人や、教室・部門・学科単位、学部単位ではどうにも解決できないものも多くあります。それらの問題の構造を分析し、解決の糸口を探るのがこのカリキュラム研究の大きな目的です。そのためには、客観的なデータの収集が不可欠です。各学部や学科などがカリキュラム改革を進める際に、基礎的データとさまざまな考え方の指針に関する情報を提供することも目指しています。こうした活動は、学部を超えた知見の宝庫である教養研究センターならではのことができるでしょう。

慶應義塾が社会のリーダーであり続け、社会のリーダーを輩出し続けるためには、現状に甘んじるのではなく、さまざまなレベルにおける前進が不可欠です。しかし、現実と理想の狭間にあって私たちはいま、変えることができるものを変える勇氣と、変えることができないものを受け容れる冷静さ、そしてその両者を見分ける知恵が試されているのだと思います。

CONTENTS

より良い大学教育を目指して	佐藤 望	1
活動報告		2
トピックス		7
インフォメーション		8
事務局だより		8

学術フロンティア超表象デジタル研究 —2005年度をふりかえって—

教養研究センターの特定研究として昨年度から始まった学術フロンティア「超表象デジタル研究—表象文化に関する融合研究に基づくリベラル・アーツ教育のモデル構築—」プロジェクトは3年計画の中間年に入りました。

これまでも何度かご紹介してきたことですが、本プロジェクトは新たな教養教育の慶應モデルを構築すべく、以下の4点を目的として展開されています。

- ①リベラルアーツ教育（教養教育）モデルのメタ理論を構築する。
- ②モデル実現のためのキャンパスデザインを行い「21世紀型キャンパス基本構想」を策定する。
- ③プロジェクト全体の活動を統括し、最終的な成果を取りまとめ、これを広く内外に発信する。
- ④国内外の共同研究機関との連携を図る。

目的の実現を目指して活動全体を統括する統合研究ボードのもとで、コンテンツ研究ユニット、学習環境構築ユニット、超表象デジタル化研究ユニットが活動中であり、その概要については外部評価を兼ねた4月22日の全体報告会でもご報告しましたが（写真参照）、この紙面をお借りして改めてプロジェクトの現状についてお知らせしたいと思います。

コンテンツ研究ユニットは、導入教育（「知」との遭遇）プログラム、「温故知新」型教育プログラム、「身体知」教育プログラム、「現代における危機的問題」教育プログラムの開発を課題に、それぞれについて国内外の調査やユニークな活動・発言を行っている方々を招いての公開研究会、シンポジウム、ワークショップの開催、授業化を想定してのHAPPなどに蓄積されている文書・映像資料のデータベース化あるいは文献リストやシラバス・モデルの作成などを進めています。

学習環境構築ユニットでは、コミュニケーション・キャン



パスとしての（当面は外国語学習にフォーカスした）自律学習のためのポータル・サイト構築とその実験的運用のための最終的な準備作業を、インタラクティブ・キャンパスとしては三田の商業地区にキャンパスのネットワーク化と社会開放型キャンパス・モデルのための実験基地の立ち上げと秋葉原クロスフィールドを舞台とした教養インターンシップ・プログラムの開発を行っています。

超表象デジタル化ユニットでは、昨年度から引き続きプロジェクト紹介や成果の公開にとどまらず、ボードやユニット間の連絡、研究成果や研究に関わるさまざまな情報を共有し、必要な場合には共同作業でそれを取りまとめていくことのできるプラットフォーム（デジタル・コンテンツ・システム）の開発と試験的運用を行っています。このシステムはHydi（ハイジ：Hyper Digital Interfaceの略）と命名され、本格的な運用まであと一歩のところまで来ています。これらの活動には多くの院生諸君が関わってくれていることにも付言しておきたいと思います。

統合研究ボードはこれら各ユニットの活動やその成果を視野に収めつつ、ユニット間の連絡・連携を図り、これを教養教育のメタ理論構築とそのモデル作成に結実させるために毎月1回のペースでボード会議を開いてきましたが、今年度からはボードの活動をより効果的かつ効率的なものへと発展させるべく研究員（有期）を雇用しました。各ユニットを巡回し、その活動を見通した上で、これらを繋ぐ枠組みに関する提言なども行ってもらっています。また、学習環境構築ユニット、とりわけバリアフリー・キャンパス研究グループには広義のバリアフリーの観点から最終成果の取りまとめにも加わってもらうつもりです。

プロジェクト全体としては、夏休み前に3回目の全体会議を開催し、ボードからより具体的で詳細なロードマップを提示することで後半のプロジェクト活動へのメンバーの意識をさらに高めて行きたいと考えています。今後とも皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

（研究代表 羽田功）

基盤研究「慶應義塾大学の教育 カリキュラム研究」報告

1. 研究目的

大学の環境が変化するなかで、大学が次代に伝えていくべき知の体系および教養のあり方を再検討するとともに、現在慶應義塾大学で行われている教育カリキュラムの在り方を検証しています。その上で、今後あるべき大学カリキュラムに関する提言を行うことを目指しています。

2. 経過

この研究プロジェクトは、2005年4月に発足しました。大学教育のあるべき姿とはという大きな視点と、現実に実施可能なより良い教育カリキュラムとはというミクロの視点とを仲介し、整合させるための政策研究です。月1回のペースで会合をもち、伊藤行雄座長（経済学部・教授）を中心に非常に熱心で積極的な議論が続けられています。

本研究は2006年までの2年計画で進められています。2005年度は、1) 講演会や勉強会の実施による現在の大学教育の問題をマクロ的視点から検証、2) 義塾におけるカリキュラムをめぐる諸問題について検証、3) カリキュラムに関するデータ収集と提言作成のための予備調査を中心に行ってきました。

2006年度は、現在の授業における成績評価方法の調査、外国語科目の実施可能なプランの策定、米国のリベラル・アーツ・カレッジのカリキュラム調査、学部カリキュラムの

比較調査、カリキュラムに関する学生アンケートの実施などを中心に活動を進めています。

3. 目標

大学という知的生産の共同体において、われわれは学生に何を伝えていくのか、学生をどのように育てていくか、学力やそれを越えたさまざまな能力、すなわち知的生産技術やコミュニケーション能力の向上や、国際的に通用する人材の育成、真の教育の質の向上のために、何ができるのか、広い視点から学び合い、研究する場としてこの基盤研究を展開しています。最終的には2006年度末に、カリキュラムに関する調査・分析結果、および短期的・中期的に実施可能なプランについて書かれた報告書を作成する予定です。

【ご案内】

研究会は塾内教職員には公開で行われています。ご出席希望の方は教養研究センター事務局 [045-566-1151、lib-arts@ml.hc.keio.ac.jp] までお知らせください。スケジュールおよび研究の経過や記録に関しては、<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/kiban1/> をご参照ください（塾内のみからアクセス可）。

（佐藤望）

基盤研究「身体知プロジェクト」

2005年5月に発足した基盤研究「身体知プロジェクト」は「身体」を切り口にした教育現場の調査と理念研究を行うと同時に、身体知教育の意義の構築と新しい理念の発信を目的として活動を続けています。発足当時から開催されてきた月例会では、メンバーそれぞれが展開する身体知教育の実態とその目的や問題点を報告し、議論を展開すると同時に、実践的なワークショップに参加しつつ、慶應義塾で実施可能なコンテンツを模索してきました。それらをもとに2006年度の活動は、以下の3点を目標に展開されています。

1. 新しい研究会のあり方を模索する。
2. 理論構築と実践を平行して行いつつ、そこから何らかの発見・研究・発信を行う。
3. 慶應義塾のカリキュラムにおける身体知教育のあり方を考える。

1に関しては教職員のみならず広く学生も参加できる議論

の場を提供し、各研究会のコーディネーターを持ち回りでいう開かれた研究会の形式をとります。2と3で述べられている理論と実践からなる2本柱の構築のための試みとしては、2006年の秋から実験授業が開始されます。実験授業のタイトルは「体をひらく、心をひらく—新しい実験授業へようこそ」（予定）。ここでは、井上ウヰマラ、佐藤仁美、岩下徹の各氏を講師陣に迎え、知的、理性的な知を補完するものとして、身体やイメージを通して体験される「気づき」を体感するワークショップを中心とした授業が展開されます。これは、知識内容を詰め込むことではなく、呼吸法や身体の動き、コラーージュを使った自己の客観視など、本来備わっているはずの身体感覚を、ワークショップを通して呼び覚ますプロセス重視の支援型授業です。対象も大学生にとどまらず、塾内の中学生、高校生、大学院生、留学生、通信の学生、教職員と広く参加を呼びかける予定です。この実験授業に興味のある方はぜひとも教養研究センター（045-566-1151、lib-arts@ml.hc.keio.ac.jp）までご連絡ください。

（横山千晶）

調査・研究セクション 「授業公開」レポート

教養研究センターでは2005年度の秋学期より公開授業を始めました。本年度春学期には13名の教員の方々が計28コマを公開しています。その中から、6月2日に本谷裕子先生（法学部・スペイン語）が佐藤望先生（商学部）の「音楽Ⅰ」（金1限）を参観されました。本谷先生の聴講の感想および佐藤先生へのインタビューについて紹介します。皆さんもぜひこの公開授業を覗いてみてください。

参観の感想（本谷裕子）

今日の授業内容は「協和性の理論」。学生数は40～50人。毎週の課題（短いメロディ作り）返却後、お手製プリントに沿って授業。音楽の素養がなければ難しいのではと思われる高度な内容。非日常的数字も出てくる。佐藤先生が、ピアノで和音を奏でポイントを板書する高いパフォーマンス度で学生を惹きつける。語学とは違う種類のcall & responseが要求される授業だ。聞いていてさまざまな疑問がわく、興味深く楽しい参観となった。

インタビュー（H：本谷、S：佐藤）

H： 高度な内容ですが、学生はすべて理解できるという前提でなされていますか？

S： 教養科目に複数設置されている「音楽」で唯一の音楽理

論に関する授業です。実際、音楽の素養がある学生がほとんどですが、それがなくても知的レベルの高い慶應の学部生は理解できだろうと期待し、敢えてこれを教養課程で展開しています。

H： 授業中のパフォーマンス、毎週の課題添削など、佐藤先生にかかる負荷も大きいのでは？

S： 私にとっても楽ではありませんが、学生にとってもかなり「エグい」授業です。課題に関して面白いのは、技術的には完璧だけれども面白くない、反対に技術的には無茶苦茶なのに破格の面白さがあるといった、理論的には説明不可能な学生の個性が、短いメロディの中にも反映されることです。

H： 疑問がいくつかわいてきました。たとえば、楽理における「聞く」と「聴く」の峻別の有無、機械による測定ではなく人間の身体性を基準にした音の読み取り方はないのか、などです。

S： 面白いご質問です。直接的回答ではないかもしれませんがお答えしますと、われわれ専門家は、音楽は特定の理論だけで論じ切ることができない「複雑系」だと考えています。ご質問内容は要するに聴き手側に立った発想ですが、聴き手の母語・生育環境・職業、音を聴くときの環境など、数え切れない要因が複雑に絡み合って「印象」が生まれます。音楽を聴くということは、無限に複雑かつ豊穡で、本質をつかんだと思った瞬間に逃げてしまう「美」を永遠に追求する悦ばしい行為なのです。授業を通じ学生がそれを理解してくれればと願っています。
(瀧本佳容子)

公開セミナー「ミシェル・フーコー 使用法」

2006年6月20日（火）17時から来往舎シンポジウムスペースにおいて「ミシェル・フーコー使用法 Michel Foucault, mode d'emploi」を開催し、気鋭の研究者たちにフーコーの大胆な「使用法」について語っていただきました。

フィリップ・アルティエール氏（CNRS [フランス国立科学研究センター] 研究員、ミシェル・フーコー・センター所長）のご発表は、この哲学者自身についてではなく彼が関わった無名の人たちについて多くを語ってくれるという、フーコーのアーカイヴの特異性を紹介するものでした。

芹沢一也氏（京都造形芸術大学非常勤講師）のご発表では、フーコーの貢献を知と制度の複合体を明らかにするものと整理されたうえで、犯罪被害者の登場と少年犯罪の誇張から犯罪の厳罰化が導かれている、現代日本社会に特有の複合体が分析されました。

原宏之氏（明治学院大学助教授）からは、フーコーの言説分析がその後たどった歴史の解説に続き、「言説編成」の分析と「発話行為」の分析の統合の必要性の主張、また映画分析



の実際の紹介をいただきました。

廣瀬純氏（龍谷大学専任講師）は、ラテン・アメリカでの「アウトノミア」の諸展開を理解するうえで重要なのは言説的なもの（地域・国家的水準）と非言説的なもの（コミュニティ的水準）の格差自体に迫るということであり、それはちょうどフーコーが記号と言説の疎隔として明確化したものと一致するという指摘をされました。

いずれも熱のこもったご発表で、予定時間を大幅に超過しましたが（残念ながら質疑の時間は十分ではありませんでした）、敷居の高い内容にもかかわらず意識の高い聴衆に恵まれ、最後まで満席でした。

(高桑和巳)

極東証券寄付講座 2006年度春学期活動報告

極東証券寄付講座では、2005年度に引き続き2つの授業を展開している。1つは「生命の教養学」と名づけられた領域横断的オムニバス講座で、複数のコーディネーターの協同作業によりテーマや構成をデザインし、多彩な分野の多彩な研究者の講義を聞かせて、「生命の時代」と呼びうる21世紀にふさわしい、特定分野に偏らない幅広い生命観育成を旨とする授業である。本年度は、中島陽子（文学部）、石原あえか（商学部）、武藤浩史（法学部）の3名がコーディネーターとなり、「生命を見る・観る・診る」というテーマの下、医学・生物学・科学論・心理学・物理学などの領域から第一線で活躍する塾内外の講師を呼んで、活気ある授業が繰り広げられている。履修者数は64名。

なお、「生命の教養学」に関連して、6月9日にはJT生命誌研究館館長中村桂子氏の特別講演「“生きている”をみつめ“生きる”を考える——生命誌の視点から」が行われ、狭義の科学を超え文化・芸術をも取り込んだ生命観の大切さが説かれた。出席者は約80名。

今1つは「アカデミック・スキルズ」と呼ばれる学問作法入門セミナーで、1クラスの定員を20名以下に抑え、かつ3名程度の担当教師が張り付いて、個人指導に近い形で懇切丁寧に大学で期待される自主的な学習方法（テーマ発見、リサーチ、プレゼンテーション、論文執筆）のスキルを「叩き込

慶應義塾大学教養研究センター

2006年度極東証券寄付講座

「生命の教養学 一生命を見る・観る・診る」

【開講時期】 春学期 木曜日3時限 13:00～14:30 / 来往舎シンポジウムスペース

【履修者数】 64名

【講義日程・講師・テーマ】

4月13日(木)	オリエンテーション	
4月20日(木)	横川謙太郎(総合研究大学院大学教授)	『動物の見る世界を探る』
4月27日(木)	岡 浩太郎(理工学部教授)	『細胞の情報伝達を見る』
5月11日(木)	柳沢賢一郎(柳沢情報科学研究所所長)	『踊れば生命が見える』
5月18日(木)	黒岩 常祥(立教大学理学研究科生命理学科教授)	『細胞誕生の謎を解く—ゲノムの完全解読から核の戦略を読む—』
5月25日(木)	中島 陽子(文学部教授)	『「みる」ことの生物学』
6月1日(木)	北岡 明佳(立命館大学文学部教授)	『錯視デザインと生命』
6月8日(木)	添田英津子(慶應義塾大学病院 移植コーディネーター)	『Gift of Life(「生命」の贈り物)—移植医療の現状—』
6月9日(金)	【特別公開講座 17:30～19:30】 来往舎 シンポジウムスペース 中村 桂子(JT生命誌研究館館長)	『“生きている”と“生きる”を考える——生命誌の視点から』
6月15日(木)	下村 裕(法学部教授)	『たまごを回して観ると?』
6月22日(木)	石原あえか(商学部助教授)	『人体情報の記録—近代ヨーロッパおよび日本における解剖図・標本・立体模型』
6月29日(木)	堀 由紀子(新江ノ島水族館館長)	『命のつながり ～海と命～』
7月6日(木)	大野 裕(保健管理センター&医学部ストレス・マネジメント室)	『自殺対策プロジェクトについて』
7月13日	総括	

む」のが授業の目的である。火曜日、水曜日、金曜日の5限に1クラスずつ設置された。火曜日の履修者数は16名、担当者は横山千晶（法学部）、佐藤元状（法学部）の2名。水曜日の履修者数は20名、担当者は鶴崎明彦（法学部）、加茂真樹（法学部）、武藤浩史（法学部）の3名。金曜日の履修者数は20名、担当者は湯川武（商学部）、村山光義（体育研究所）、伏見岳志（商学部）の3名。

(武藤浩史)

「生命の教養学」特別公開講座

中村桂子氏講演会「“生きている”をみつめ“生きる”を考える——生命誌の視点から」

去る6月9日（金）午後5時半から7時半まで、日吉キャンパス来往舎内シンポジウムスペースで、極東証券寄付講座「生命の教養学」の特別公開講座として、中村桂子氏の「“生きている”をみつめ“生きる”を考える——生命誌の視点から」と題する講演が、約80名の聴衆を集めて行われた。分子生物学者として一世を風靡して『ゲノムが語る生命』など多数の著作を有し、現在は科学のみならず文化・芸術等を含んだ複眼的視点を重視する独特の生命観に基づいた研究・啓蒙活動を展開するJT生命誌研究館の館長を勤める中村氏は、20世紀に生じた科学技術的方法の支配に抗して、より広い視座から「生命」に関する知を「表現」し「物語る」ことの大切さを強調した。また、生物学の歴史を振り返って、普遍性に焦点を当てた細胞説や生化学と多様性を重視する進化論が生まれた19世紀を重要な転換期と見、さらにはこの普遍性と多様性の視点の統合が20世紀生物学のゲノム革命によって可能になったことの画期的な意義を指摘した。38億年の



生命の歴史と生物の相互関係を物語るものとしてのゲノムを研究することがすなわち「生きている」ことを見つめることであり、ヒトとしての「私」のみならず「生きもの」としての「私」を考えることが生命誌的視点から捉えた世界観であると結論づけた。また、人工的な巧みを通して自然を創るという日本文化の伝統が人類の未来にとって持つ大きな可能性を、伊藤若冲の絵や古典文学から例を挙げて示した。

フロアからも次々と活発な質問が出て、講演会は盛況の内に幕を閉じた。

(武藤浩史)

日吉行事企画委員会 (HAPP)

本年度も、日吉行事企画委員会は、春の新入生歓迎行事と秋の公募企画行事を二本の柱として活動を開始しました。2006年度新入生歓迎行事は現在進行中ですが、未了分を含めて以下のものを採択・主催しました。

春の音連れ (おとづれ) — 表象として「フランス流花鳥風月」	ピアノ演奏とトークと映像が融合するコンサート	4/21(金)
田丸公美子氏講演会 (イタリア語通訳・翻訳者)	田丸公美子氏による講演会	4/24(月)
舞踏公演「記憶の海」	山本萌氏による舞踏公演	5/10(水)
能「隅田川」	坂井音重氏による能公演	5/16(火)
千住明講演会	新入生を意識し、愛校心を深める意味で、活躍する塾員の講演会を開催。	5/30(火)
小松原庸子講演会	小松原庸子氏による講演およびフラメンコダンスの実演	6/21(水)
「モーツァルト・フェスティバル」生誕250年記念企画	フェスティバル形式のポジティブオルガンとチェンバロの連続演奏会。	6月中の2週間
環境週間	パネルディスカッションや展示講演会などのイベントを開催し、環境問題への関心を喚起する	6月中の1週間
塾長と日吉の森を歩こう	複谷散策と塾長写真賞表彰式ならびに塾長との懇談会	秋学期



日吉行事企画委員会は、塾内諸機関との共催を積極的に展開しています。上記のうち、田丸公美子講演会 (外国語研究センターとの共催)、舞踏公演 (アートセンターとの共催)、能公演 (能楽研究会との共催)、環境週間 (環境サークルECOとの共催) がこれにあたります。共催事業は、経費や労力面での効率化を図るとともに、塾内での連携を強め日吉キャンパスの活性化にも大いに資するところがあることを、ここ数年の共催によって私たちは確信しています。今後も積極的に展開してゆきたいと考えていますので、秋学期の公募行事へのご支援・ご協力をよろしくお願いします。

(小菅隼人)

塾長と日吉で語ろう

2006年4月19日(水) 5時15分より、来往舎シンポジウムスペースにおいて、「新入生歓迎行事：塾長と日吉で語ろう—安西祐一郎塾長講演会」(教養研究センター・塾長室共催)が開催されました。この講演会は、2004年度、2005年度(HAPP・塾長室共催)に引き続き、3年目になります。これは、新入生と直接語り合う機会を持ちたいという安西祐一郎塾長の強い希望と、新入生と教職員が共に考え創る日吉キャンパスという教養研究センターが考える理念が合致したことにより生まれたものです。

当日は、新年度の忙しい時期にも拘らず、100名近い学生および教職員が集まり、約1時間の講演と予定を大幅に上回る50分の質疑応答を行いました。新入生の率直な質問に塾長が自らの経験を交えて真摯に答え、さらに、終了後も50名の学生が残って、ファカルティ・ラウンジにおいて塾長ときわめて充実した時間をもちました。後日、この行事に対するアンケートは、全てオリジナルを塾長に送りましたが、それは、この企画が、学生のみならず、指導者としての塾長自身の「成長」にも繋るようにしたいという思いがあったからです。



慶應義塾塾長は、日本を代表する私学の責任者として教育界における公務を持ち、また、義塾全体の経営の責任者として財政・労務にも奔走しなければなりません。しかし、その原点は学塾の長としての塾生との交流にあるはずであり、安西祐一郎塾長自身がそのことを強く意識しての今回の講演会でした。この講演会開催に際しては、創立150年を控えたこの時期に超多忙な塾長を日吉の新入生のために呼ぶことについて、関係部署に議論があったのは事実です。しかし、講演会全体を通して、あくまで塾生を育てることが塾としての第一の使命であるという塾長の熱いメッセージを、今回のコーディネートにあたって私は強く感じました。その意味でも塾長講演会は今年も大成功であったと言えます。

(小菅隼人)

2005年度 第2回運営委員会報告

2006年3月16日(木)、来往舎中会議室において、2005年度第2回運営委員会が開催されました。

西村常任理事の挨拶に続き、2005年度後期の活動について、1) 研究企画ボード、調査・研究セクションからは、「日本におけるドイツ年」に因む講演会・公開セミナーの開催、「新しい教養授業の支援」事業成果報告会、FD関連講座の開催、公開授業、HRP2005(日吉キャンパス研究成果報告会)への参加等について、2) 交流・連携セクションからは、「開かれゆくキャンパス」の一環として学生フォーラム、「21世紀の商店街」シンポジウム、義塾一貫教育校生と大学生の協働による群読会の開催、彫刻家・金沢健一氏の展覧会等につ

いて、3) その他「センター選書」、HAPP、極東証券寄附講座、キャンパス公開講座について、横山所長ほか各担当者より詳細な報告がなされました。広報・発信セクションからは、これら学術的な催しを「CLA-アーカイブズ」として発信していることなどが報告されました。また、基盤研究、特定研究、一般研究についても、その活動状況が報告されました。

引き続き審議事項に入り、田上竜也商学部助教授の留学に伴う後任の副所長(残任期間)に佐藤望商学部助教授を推薦すること、教養研究センター規程第4条第6項に定める研究員として、特別研究教員(有期)、兼任研究員に加え、新たに研究員(有期)を置くこと、2006年度活動計画(案)および予算(案)が提案され、協議の上、いずれも承認されました。なお、規程改正については、その後大学評議会、常任理事会を経て、5月9日付施行が正式に決定されました。

(吉川智江)

Topics

トピックス

2006年度日吉予算管理部門内調整費「新しい教養授業の支援」公募事業の採択結果

2006年度日吉予算管理部門内調整費のうち、「新しい教養授業の支援」公募事業として3000万円の予算が認められました。日吉キャンパスとして新しい教養授業の開発・実施およびこれに関する作業・成果の発信、あるいは既存の授業の改善などを目的とする事業を募集し、効果の期待できる事業に対して支援を行う企画です。日吉キャンパス専任教職員にむけて第1次、第2次の2回にわけて公募したところ、15件(総額28,400,905円)の応募申請があり、「新しい教養授業の支援」選定委員会は厳正な審査の結果、「新しい教養授業の支援」公募事業として次の事業を採択いたしました。(今年度の選定委員会は、研究企画ボードのメンバーだけでなく、教養研究センターによって委嘱された委員を含めて組織されています。)

2004年度から開始したこの企画は、身体知、社会貢献、地域連携、学部横断、IT活用など、新しいコンセプトに基づく授業の開発・実践、既存授業の改善をするための関連研究など多岐にわたる事業が新しく提案されています。

第1次採択 8件(総額17,400,000円) [応募申請 8件(総額20,540,162円)]

事業代表者	事業題目	採択金額
金子 洋之	英語と画像で学ぶ生命現象; Let's get acquainted with biology in English and in visual images	4,400,000
中山 純	ドイツ語学習支援環境構築プロジェクト(継続)	6,150,000
篠塚 憲一	ボランティア学ってなに! III	2,500,000
小湊 昭夫	ヒヨシエイジ2006を通して経験としての教養教育の実践—スポーツとアートと社会貢献による地域活性化コミュニティデザイン—	2,000,000
松原 彰子	日吉台地を中心とする土地利用(先史~近現代)の実態調査とGIS分析	1,000,000
鈴木 伸一	Ernst Logarの写真展および講演会とワークショップ	800,000
三瓶 慎一	法学部設置全学部対象ドイツ語インテンシブコース受講生の研修旅行とその準備作業	250,000
トビン・ロバート	Global Leadership: 世界で羽ばたけるリーダー論	300,000

第2次採択 6件(総額4,425,134円) [応募申請 7件(総額7,860,743円)]

事業代表者	事業題目	採択金額
村越貴代美	映像資料を中心とした中国語教材の開発	1,540,200
中村 優治	文学部英語プレイスメントテストの科学的検証と項目銀行の開発	1,100,000
戸瀬 信之	理工学部・経済学部における数学教材のデジタル化	1,173,870
鶴崎 明彦	地域横断的な新しい地域文化論の構築を目指して—近代世界システムの中の美術	800,000
長田 進	「自由研究セミナー」における学生フィールドワーク活動のデータベース化に伴う事業	242,064
末吉 雄二	日吉美術研究所蔵の美術作品カラーライドのデジタル化	369,000

2006年度慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座

「本年度は、「自然と科学と人間」というテーマで行います。趣旨は、「長い歴史において人類が営々として築いてきた知的営為の結実としての自然科学の成果、その成果の社会的意義に関する功罪両面からの論議、自然科学の研究を実際に担っている（または担ってきた）多くの研究者の科学への情熱と悩みなど、この問題に関して多面的な側面から光を当てることによって、自然科学の意義に関する幅広い論議を提供することを目指している。自然科学研究の主体たる研究者自身が自己表現をこめて語る<自然科学とは？ 自然科学の意義とは？>これが本講座の一つのテーマであり、研究者の研究活動の成果とその有り様に関して考えることがもう一つのテーマをなしている」ということです。

スケジュールは以下のとおりです。

9/30	3時限	表 實：訓蒙窮理図解から一慶應義塾における自然科学教育の歴史一
	4時限	西村顕治：「年々歳々花おなじからぬ」21世紀
10/7	3時限	小沼通二：湯川・朝永生誕百年（1）一創造性と緻密さによるノーベル賞一
	4時限	小沼通二：湯川・朝永生誕百年（2）一「科学と社会」に対する取り組み一
10/14	3・4時限	団まりな：もし生物進化の論が提唱されていなかったら（1）（2）
10/21	3時限	表 實：太陽と地球と…
	4時限	林田 愛：科学と「憐れみ」の心一ベルナル主義の陥穽一
10/28	3時限	竹中淑子：パラドックスとその科学的意義
	4時限	石原あえか：地球を測る一仏大革命期の天文学者たち一
11/4	3時限	コミネティ：科学の夜空に舞上がる吸血鬼一ヨーロッパ啓蒙時代の生んだ不可思議な論争について
	4時限	渡部睦夫：数学と文化と社会
11/11	3時限	小瀬村誠治：植物は光が好き？
	4時限	増田直衛：自然現象や生き物の動きを見る～ゲーテ的自然学のススメ～
11/18	3時限	児玉光義：江戸時代の天文学
	4時限	秋山豊子：生物科学から見た「科学」の楽しみと必要なこと
11/25	3時限	児玉光義：「環海異聞」とプラネタリウム
	4時限	樽井正義：人間は自然？ 哲学的人間学の視点
12/2	3時限	小淵昭夫：雷一神話的人物から科学者へ
	4時限	下村 裕：科学と疑似科学

（小淵昭夫）

クリスト&ジャンヌ＝クロード講演会開催

教養研究センターでは、毎年、国内外の学者・芸術家・有識者を招聘し、講演会やシンポジウムを開催すると同時に、学生と現代芸術家によるコラボレーションを行ってきました。これらの企画は、教職員・学生に対して、社会・教育・芸術などの多方面で活躍する方々の話を聴講することで最新の情報＝教養に触れる機会を作り、活動の現場に参加することで、身体を通して新たな知見を獲得することを目的としています。

このたび、教養研究センターは、京都造形芸術大学国際芸術研究センターとの共催、慶應義塾大学アートセンターの協力で、20世紀半ばから現代美術の最も重要なアーティストとして世界的に高い評価を得ているクリスト&ジャンヌ＝クロードを招聘し、講演会を開催します。ふたりは2005年に実現したニューヨーク、セントラルパークのためのプロジェクト「The Gates」でも注目を集めたばかりです。今回の講演会に先立ち、このクリスト&ジャンヌ＝クロードの芸術活動を多角的に知るために、作品ポスター展示会、ビデオ上映会ならびにプレ講演会などのプレ・イベントも開催します。プレ講演会では、慶應義塾と縁が深く、クリスト&ジャンヌ＝クロードとも親しい千住博氏を講師にお迎えし、クリストと現代アートに関する紹介や千住氏自身の芸術や制作に対する考えをお話いただく予定です。

今回の企画は、日吉キャンパスに通う学生たちが、長年に亘り現代美術を牽引し、活動を通してさまざまな問題提起を行ってきたアーティストの生の声を聞くことで、世界レベルの芸術を肌で感じることが出来る貴重な経験提供の場となることでしょう。

（講演日程）

講演会 2006年10月30日（月） 来往舎 *一般公開
クリスト&ジャンヌ＝クロード 両氏
テーマ「クリスト&ジャンヌ＝クロード講演会」（仮題）

なお、千住博氏によるプレ講演会やその他のプレ・イベントの詳細は、おって教養研究センターのホームページやポスター・ちらしにてお知らせいたします。

（横山千晶）

事務局だより

久しぶりに教養研究センターの業務に携わることになりましたが、センターでは以前にも増して新しいアイデア、プロジェクトが次々と生まれており、2年目でありながら、4月より新しくメンバーとなった学術フロンティア担当の渡辺と共に、新人さながらの日々を過ごしております。改めて先生方の教養教育にける貪欲さ、「教養」を「研究」ということの不変の価値と、それに魅入られてしまった研究者の苦くも甘美な苦勞を目の当たりにする日々です。半年振りの教養研究センター業務は実にそのスケールを増し、多少自分の経験を頼みにしていた私の期待は見事に裏切られ、やはり昨年同様、気づけばどこからか舞い降りてくる業務をただ

ひたすらにこなすこととなりました。気づけばあっという間に過ぎる1週間を、どのように私自身の、ひいては教養研究センターの知識として蓄積してゆけばよいのか。これが、ここ最近の課題となっています。

（高橋純子）

Newsletter

2006. Jul. No.8

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

発行日 2006年7月20日

代表者 横山 千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111（代表）

Email lib-arts@ml.hc.keio.ac.jp

http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/

●お知らせ●

教養研究センターのメールアドレスが lib-arts@ml.hc.keio.ac.jp へ変更となりました。今後ご連絡の際にはこちらのアドレスまでお願いいたします。